

バルト海の秘宝を狙え

S. K

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ルパンは不二子に、バルト海の子が愛した指輪を盗んでくれと頼まれる。はるばるイギリスまででかけ、指輪にアタックをかけるが…
さて…盗めたのか…？

目次

バルト海の秘宝を狙え

1

バルト海の秘宝を狙え

小さな電球がただ一つポツリとついた、薄暗くこじんまりとしたバーの店内。

そこにグラスを傾ける一組の男女がいた。

「ねえルパン?」

ルパン　そう呼ばれた男はシャープに整った顔立ち、お宝と女に関しては何事にも絶対に見逃さないと言わんばかりの目、そしてなんといつても顔の輪郭に合わせて生えるもみ上げが特徴的な中背の男。

「なんだ、不二子?」

ルパンは答える様に女の長いブロンドの髪に触れる。

不二子　そう呼ばれた女は肩を派手に露出させた鮮やかな赤いドレスに身を包み、細いしなやかな指先でじゃれる様にルパンの首を擦る。

「盗つてきて欲しいお宝があるの……」

猫なで声でそう囁く

「もちろん不二子の為なら何でもするぜ?」

ルパンは声を大きくし、嬉々とした表情で言う。

「ふふ： ありがとう…♪」

「で、その宝つてえのは？」

「バルト海に沈む海賊のお宝、特に530カラットのダイヤの指輪よ。」

18世紀前期から中期にかけてバルト海を中心に荒らし回った女海賊、アルビダ。彼女の指についていたとされる超大粒のダイヤなの」

「で、そいつは今どこにあるんだ？」

ルパンはグラスを傾け、紫色の液体を流し込む

「ロンドン塔の展示室、それも嚴重警備よ。でもルパンなら簡単よね？」

「なるほどな… 任せとけての… ほんじゃそうと決まれば早速ロンドン行くか

…」

2人は液体を流し込み、バーを後にした

半日経ち、ここは英国ロンドン警視庁

その警視総監室で焦げ茶色のトレンチコートを着込んだ目つきの悪い中年男性が総監と向き合っている。

「私、フランスから出向してきました、ICPOの銭形です。ルパン三世の予告状が届い

たとの事ですが……」

「おおミスター銭形、まあお座りになって紅茶でも……」

「いや、直ぐにでも特殊部隊をおかしくください！」

「まあまあそんなに慌てることはない。まず紅茶でも……」

悠長な総監に相對して銭形は顔を真つ赤にして言う。

「いかんです！ きゃつは既にロンドンに入っているのですぞ……！」

「まあまあ……まだ犯行時間まで暫くあるのでね……」

総監は相変わらず悠長に紅茶を淹れる。

ダージリンの芳醇な香りが部屋いっぱいに広がり、今までしかめ面で頬を真つ赤に染めていた銭形の顔をも和らげていった

「そうですね……まだ時間がありますな……」

「うむ……では紅茶飲むかね……？」

総監のやわらかな表情に負け、目の前に出された紅の液体に一口。

「さてミスター銭形、どのようにしてルパン三世を掴まえるのですかな……？」

「お任せ下さい、総監。私は……」

滔々と語り出す。その口調はルパン逮捕という並々ならぬ熱意が満ち満ちてあつたが……

「ふああ……」

珍しく大欠伸をする

「おや、ミスター銭形？どうされましたかな……？」

「いや……いやなに……長時間の移動で疲れが……」

言葉を発しかけたままソファに倒れ込んで高いびきをかく。

「ミスター銭形！ミスター……」いくら揺さぶっても起きる気配のない銭形を一目見て、にやりと口角を上げる。

「……油断大敵だぜ……とつつあん……」

総監は自らの顔に手をかけると思い切り引き剥がす

「暫くここで総監と共におねんねしててちようだい……」

ルパンはニヒヒと笑み、部屋を後にした。

雨の街らしく雨の降りしきるロンドン。

窓の外には、沢山の武装警官や王室の護衛兵らがネズミ一匹通すまいと周囲に向けて鋭い目を光らせている。

「凄いい警備だぜ……さあすが王室の財産だな……」

ルパンはにやりと笑み、彼らを見渡す。

「で、どう攻める？ルパン」

次元が傍にならんで煙草を啜える。

眼前には11世紀の面影を残す2つの塔がそびえ立っている。

「…行き当たりばったり、いつもの手で行きますか…？」

ルパンは暫く考えた後、ゆっくりと口を開く。

「けっ…バカを言うな。相手は銭形隊、加えて護衛兵までいるんだぞ…？」

次元は呆れてため息をつく

「なあに俺に任せておけての…」

そういうと塔を見上げつつにやりと笑んだ。

昼間の雨が嘘の様に止み、水たまりに満月がくつきりと写っている。

ロンドン塔の警備も夜が耽るに連れてどんどん減っていきしまいには護衛兵と警官隊がまばらに立っているだけとなった。

そんなロンドン塔のてっぺんに怪しく蠢く2つの人影。

その人影はホワイトタワーから内部へ侵入する

「さあてと…お宝ちゃんはどこにあるのかね…？」

ルパンは掌をすり合わせてにやにや。

「油断するなよ……？とつつあんの罠かもしれないねえからな……」

次元は冷静に分析しルパンを嗜める。

「けっ……分かってらあ……」

「それならいいんだが」

ルパンはブツブツと言いながら懐から懐中電灯を取り出して点灯させる。

建物内は当時のゴシック様式の髓を結集したイギリスイッチの建物であった事が伺える。

しかし今は闇と寒風が支配する巨大な城だ。

そんな中を暫く歩いていくと

「おっ……あつたあつた」

大胆にもガラスケースを破り、直接手に取る。

「長居は無用だ、ずらかる……」

突然スポットライトが当てられ2人は目が眩む。

暫くして目が慣れてくると、まわりの状況が取れるようになってきた。

我々は警官隊と護衛兵に囲まれていること、各々の兵はライフルや矛を我々に向けていること、その中心には見覚えのある男がいること……

「ガハハハ……ルパン、遂にお縄を頂戴する時が来たようだな……！」

「あんれえ……？総監室でおねんねしてたんじやなかったっけかあ……？」

ルパンは茶化す様に言う。

「あの時、ワシはお前の作戦にまんまと引つかかるフリをしただけなのだ……！」

「けえっ……！そりやないぜ……汚えぞ……！とつつあん……！」

「なんとでも言え……！お前はムシヨ行きなのだから」

その間にも包囲園はじりじりと狭まり、次第に各々の持つライフルや矛の先がギリギリと妖しい輝きを放つ。

「遂に大人しくお縄につく決心がついた様だな」

「しょうがねなあ……なあ五工門」

その時、石の天井にぽっかりと大穴が開く。

そしてその屋根であつた部分は見事、銭形の頭を直撃、銭形は下敷きになつて動けない。

「また……つまらぬ物を切つたか……」

名刀斬鉄剣を鞘に収めると、警備兵らの武器も一刀両断されていたことが判明

これには護衛兵らも驚きを隠せず、腰を抜かし誰一人としてルパンを捕らえられなかった。

「ほんじゃ、とつつあん」

そんな動揺を他所に、一味は大穴から脱出しそそくさと逃亡するのだった…

「ほれ、不二子ちゃんのお望みの品だけ…?」

「本当に盗ってきてくれたのね…!嬉しい…!ありがとう…!ルパン

!」

アジトで合流した不二子に、ルパンはそつと彼女の薬指に指輪を嵌める。

「綺麗…まるで海の覇者になった気分…」

不二子はうつとりとダイヤを見つめる。

「折角不二子の願いを叶えたんだ…」

ルパンはその様子を見ながらニタニタと笑み、うしろから不二子の胸を揉もうとする

も…

「じゃあね…♪ルパン…♪」

一足早く単車に跨り、そそくさと去ってしまう

「不二子…!」

逃げられた男はその様子を見守り、にやりと口角を上げた

Fin.